

～世界に認められた沖縄の宝の海
『ホープスポット』を未来へ～

辺野古・大浦湾 シンポジウム2021

9/11 (土) 13:00～
終了 15:45

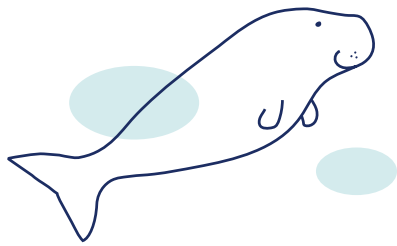
主催 | 沖縄県

企画運営 | 公益財団法人日本自然保護協会

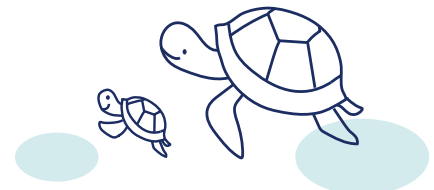
講演要旨集

プログラム

ごあいさつ	13:00～	玉城デニー 沖縄県知事あいさつ
第1部	13:10～	基調講演 鎌尾彰司 (日本大学理工学部准教授) 「辺野古の軟弱地盤と基地建設」
	13:40～	基調講演 安部真理子 (日本自然保護協会 保護部主任) 「辺野古・大浦湾の『ホープスポット』認定について」
	14:05～	ビデオメッセージ シルヴィア・アール博士 (海洋学者、ミッション・ブルー代表)
第2部	14:20～	パネルディスカッション 「辺野古・大浦湾の価値を探る」 コーディネーター 吉田正人 (筑波大学大学院世界遺産専攻教授)
		話題提供 中井達郎 (国士舘大学講師) 「海と陸が出会う場所～辺野古・大浦湾～」
		話題提供 藤田喜久 (沖縄県立芸術大学全学教育センター教授) 「大浦湾の生物多様性について～甲殻類を中心に～」
		話題提供 吉川秀樹 (ジュゴン保護キャンペーンセンター国際担当、 Okinawa Environmental Justice Project 代表) 「ホープスポット認定の意義：辺野古・大浦湾を守るために」
	15:40～	声明採択 辺野古・大浦湾の貴重な自然を守るための声明
	15:45	終了



はじめに



辺野古・大浦湾は、多くの生命が満ちあふれる生物多様性豊かな海であり、2019年10月には日本で初めて『ホープスポット』（希望の海）に認定されました。沖縄県では、この辺野古・大浦湾の価値や貴重性について、多くの県民、国民の皆様にもっと知って頂く必要があると考えています。

そのため、科学的観点から見た大浦湾の自然環境やその貴重性について広く県民、国民の皆様に認識して頂くことを目的に、国内外の専門家による「辺野古・大浦湾シンポジウム 2021～世界に認められた沖縄の宝の海『ホープスポット』を未来へ～」を開催します。

本シンポジウムが、多くの人々が大浦湾の貴重性について理解を深め、きわめて生物多様性豊かで世界的にも貴重な海域である辺野古・大浦湾一帯の保全に繋がることを願います。

令和3（2021）年9月11日

沖縄県

講演者プロフィール



鎌尾 彰司 | かまお しょうじ

日本大学准教授。理工学部土木工学科環境地盤研究室で軟弱地盤の沈下、砂地盤の液状化さらには汚染土壌問題等幅広く研究を手がけている。最近では、外環自動車道の陥没事故調査やリニア新幹線大深度地下トンネルでの施工の安全性に関してマスコミ等で解説をしている。辺野古の軟弱地盤問題には2018年の新聞記事で取り上げられた「マヨネーズ並みに柔らかさ」以降関わりを持ち、県へ「軟弱地盤上の構造物建設に関する意見書」の提出や「米軍基地問題に関する万国津梁会議」での講演等でも、軟弱地盤の危険性について発言をしている。



安部 真理子 | あべ まりこ

(公財)日本自然保護協会 保護部 主任。大学、大学院にて生物学と生化学を専攻し、WWF ジャパンに8年間勤務。オーストラリアのジェームズクック大学院修士課程に留学し、続いて琉球大学博士課程にてアザミサンゴの多様性に関する研究で博士号(理学)を取得。1997年に日本国内でのリーフチェック立ち上げに関わった一人であり、以来コーディネーターをつとめている。沖縄リーフチェック研究会会長、沖縄県サンゴ礁保全推進協議会理事、ラムサール・ネットワーク日本理事。現職、日本自然保護協会では2010年4月より沖縄・奄美の問題や日本の沿岸管理の問題を担当している。



シルヴィア・アール

米 NGO ミッションブルーの代表をつとめ、2009年よりホープスポットと呼ばれる海洋保護区を世界中に設置し海の保護を広めている。海洋探検家かつ海洋学者であり「深海の女王(Her Deepness)」と呼ばれている。NOAA(米国大気海洋局)のチーフサイエンティストの経験もある。ナショナルジオグラフィック協会所属の探検家でもある。『ワールド・イズ・ブルー：乱獲、汚染、絶滅——母なる海に迫る危機』(日経ナショナルジオグラフィック社)など150以上の出版物を執筆している。



吉田 正人 | よしだ まさひと

筑波大学大学院世界遺産専攻教授、国際自然保護連合(IUCN)世界保護地域委員会(WCPA)委員、WCPA日本委員会副委員長、(公財)日本自然保護協会専務理事

自然保護の現場における生物多様性の保全から世界自然遺産を含む自然保護法制度を研究対象としている。著書に「世界自然遺産と生物多様性保全」地人書館、「自然保護～その生態学と社会学」地人書館、「改訂版生態学から見た野生生物の保護と法律」共著・講談社、「世界の生物多様性を守る」共訳・日本自然保護協会、「世界遺産を問い直す」山と溪谷社など。



中井 達郎 | なかい たつお

国土館大学・東京国際大学・甲南大学非常勤講師、九州大学大学院学術研究員。

(公財)日本自然保護協会参与(社)日本サンゴ礁学会保全学術委員会委員

日本自然保護協会に18年間勤め、研究部長や普及教育担当部長を務める。その間、レッドデータブックの作成や原生自然環境保全地域の調査、さまざまな自然保護問題(石垣島白保サンゴ礁問題、長良川河口堰問題、小笠原空港問題など)などを担当する。現在はサンゴ礁地域などでの人と自然との関係について研究を進めると同時に、沖縄を中心とする各地での自然環境保全と持続可能な地域づくりにかかわる活動を行っている。専門：自然地理学・サンゴ礁地理学・自然環境保全。博士(理学)。



藤田 喜久 | ふじた よしひさ

沖縄県立芸術大学 全学教育センター・教授。2002年に琉球大学大学院理工学研究科博士後期課程修了(博士:理学)後、琉球大学非常勤講師やNPO法人海の自然史研究所代表理事などを経て、2015年より現職。専門は海洋生物学(特に甲殻類と棘皮動物)。日本甲殻類学会学会賞(2004年、2013年)、沖縄生物学会学会賞(2012年)、沖縄地理学会論文賞(2017年)などの受賞歴あり。また、沖縄県の各地域(主に離島地域)において、科学教育、環境教育、教育普及活動(講演会、観察会、博物館企画展の制作)、自然環境と生物の保全活動などを数多く行なっている。



吉川 秀樹 | よしかわ ひでき

ジュゴン保護キャンペーンセンター 国際担当、Okinawa Environmental Justice Project 代表。

沖縄のやんばる地域で生まれ育ち、米国とカナダの大学、大学院で人類学を学び、タイで民族と国家の関係をテーマに研究調査を行う。その後1999年沖縄に戻り、県内の大学で非常勤講師を務めながら、人類学者として沖縄の米軍基地と環境の問題に実践と研究の両面から取り組む。問題解決のために、環境、人権、平和の繋がりに着目し、国内外のNGOや市民社会グループと連帯しながら、国際自然保護連合、国連、米国政府機関へ働きかける活動を行っている。

辺野古の軟弱地盤と基地建設

鎌尾彰司

辺野古崎のある大浦湾は自然の宝庫として知られている。絶滅危惧種 262 種を含む、5,334 種の様々な生物が見られる我が国有数の地域である（写真－1、2 参照）

この湾内には海面下 90 m にも及ぶ深い谷があり、その谷に比較的新しい時代（およそ 1 万年前～現在まで）に堆積した砂と粘土の軟弱地盤が形成されていることが防衛省の地盤調査によって判明した。概略設計では軟弱地盤を想定していなかった設計が、水深 30 m の海底地盤に存在する軟弱地盤の厚さを約 40 m として、埋立工事の設計が変更された。さらに、その数ヶ月後に軟弱地盤の厚さが約 60 m に再度変更がなされた。新たな調査結果によるものと思われる。（図参照）

この軟弱地盤の驚くべきことは、建設工事の設計の際に用いられる土の相対的な硬さを示す「N 値（エヌチ）」がほぼゼロが連続していることである。「N 値=0」とは、調査実施に先立ち、おもりを載せただけでロッドの貫入が進んでしまうくらいの軟弱さを示している。そして軟弱地盤の厚さが変更当初の 40 m から 20 m 増え、60 m に修正されることになった影響も大きいものがある。すなわち、軟弱地盤を改良する建設機械（写真」3）が、海面から 70 m までの深さまでしか届かないことである。海面下 90 m となると機械が届かず、地盤改良することができない部分が出てくる。そのため、防衛省側はこの 20 m の部分が「非常に硬い」という表現を用いたり、軟弱な地盤調査の結果が見つかって「調査の精度に信憑性がない」など発言されたりしてきた。すなわち、届かない 20 m 分の軟弱地盤は、実は軟弱ではなく地盤改良は不要であるということを主張し始めるようになっていたのである。

我が国が保有する海上での地盤改良船では、数億円を掛けて改装しても海面下 70 m までしか地盤改良をすることが出来ない。すなわち、施工機械が届かない 20 m の部分は未改良のままにするしかない。軟弱地盤を未改良のままにして、埋立工事を行うと、地盤が圧縮して密度が大きくなる（すなわち強度が高くなる）までに長い時間を要することになる。さらに改良できない部分は粘土質であるため、埋立工事中の沈下量が大きくなることはもちろんのこと、埋立工事が終了しても長期間にわたり未改良の粘土地盤に継続して大きな沈下が発生することになる。結果として完成した滑走路が数年後には沈下による段差等が発生して、補修工事が必要になることが予想される。地盤改良が必要なエリアは広く、直径 0.8 ～ 2.0 m もの砂の杭を 7 万本以上軟弱地盤に投入しなければ埋立工事はできない。当初からの建設費は約 3 倍に膨らみ、本体工事の工期も 9 年以上となることが明らかになった。さらに、軟弱地盤に対して詳細な地盤調査をしないで、このまま建設工事に取りかかると工事中に軟弱地盤の沈下量が大きくなったり、沈下が終了するまでに要する時間もさらに長期になったりするなどして、工費も工期もさらに増える可能性もある。詳細な地盤調査の実施が不可欠となる。

また、大浦湾に地盤改良船が数十台の規模で、十年近く工事が継続されることによって、生態系を含めた大浦湾の自然への影響が問題となる。一度破壊された自然は、そうたやすく元には戻ることはいえない。地盤改良船のイメージは写真 3 に見られるとおりである。船の上に、改良する深さに応じたパイプを数本立てて、軟弱地盤に砂を投入して改良が行われる。もちろん、排気ガスや騒音を出しながらの工事になる。また、埋立工事に必要な膨大な土砂採取のため自然環境を破壊す

る。周辺海底からの地盤改良用の海砂の浚渫や、埋め立て場所の海底へ大量の土砂の投入に伴う海水の濁り等が生態系へ影響も与える。

政府はこれらひとつひとつを丁寧に県民の皆さんに情報公開し、大浦湾を含む沖縄県の豊かな自然環境を守っていただきたいと思います。



写真1 工事前の辺野古崎の様子(写真提供:photolibrary)



写真2 最近の辺野古崎の様子(2021年7月、写真提供:朝日新聞社)

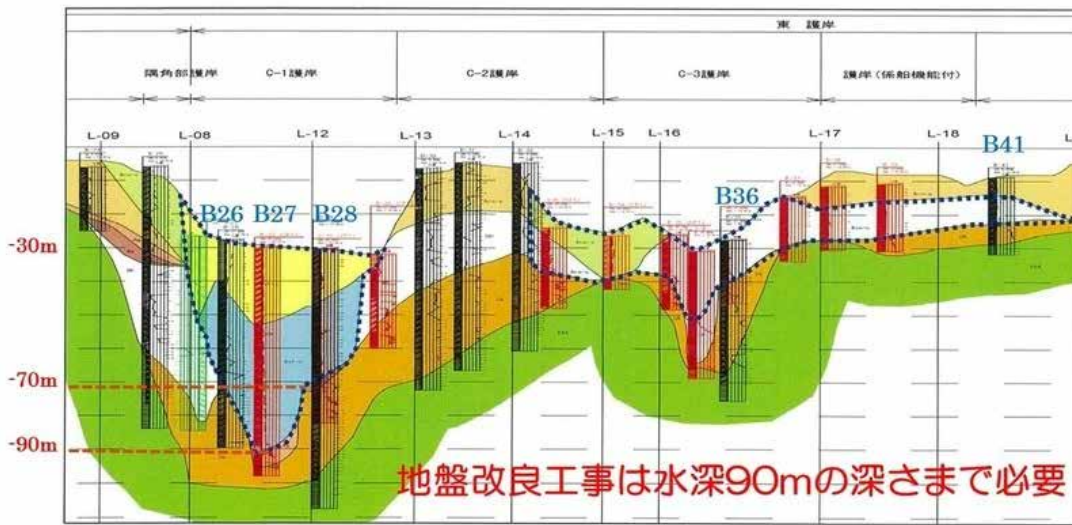


図 2.1-3 大浦湾側外周護岸部の検討に用いた土層(S-S断面)

図 辺野古の軟弱地盤の堆積状況。防衛省発行『地盤に係る設計・施工の検討結果 報告書』(平成31年1月)北上田毅氏改変

<https://blog.goo.ne.jp/chuy/e/-da408008204d9bb3b45f4069bb1617db>



写真3 海底の軟弱地盤を改良する地盤改良船(SCP工法・写真提供:ピクスタ)

辺野古・大浦湾の「ホープスポット」認定について

安部真理子

辺野古・大浦湾沿岸域一帯は 2019 年に日本で初めて「ホープスポット」(Hope Spot: 希望の海)に認定された。ホープスポットは世界的な海洋学者として名高いシルヴィア・アール博士が率いる NGO「ミッション・ブルー」が行っている活動で、世界的に重要な海をホープスポットとして認定し、重要であることを周知し保護の網をかけることを促す活動を、2009 年から実施している。現在世界で 135 地点が認定されている。2030 年までに世界の海域の 30% を海洋保護区にするという生物多様性条約の「30 by 30」の目標に貢献することを視野に入れている取り組みである。

辺野古・大浦湾は防衛省の環境影響評価書では 5,334 種もの生物が海域から記録されており、そのうち 262 種もの絶滅危惧種が含まれる。わずか 20 km² ほどの辺野古・大浦湾に 5,300 種以上の生物が生息していることが特異であることは、生物多様性が高いことで知られているハワイのパパハナウモクアケ海洋国立モニュメント (151 万 km²) に 7,000 種の生物種が記録されていることと比べてもわかる (図 1)。環境影響評価後もナマコや甲殻類などの新種や未記録種が次々に報告され、最近も新種のカナボウヤギスナギンチャク (*Umimayanathus (Gorgoniazoanthus) kanabou*) が発見されたばかりである。

この海域は、沖縄島周辺で最大の規模を有する海草藻場が広がり、サンゴ礁、砂場、岩場、泥場、マングローブ林、ガレ場など多様な環境を持つ。絶滅危惧種であるジュゴンや、沖縄県内の他のアオサンゴ群集と異なる遺伝子型を持つ、規模の大きなアオサンゴ群集、そして特異な生態を持つ深場に生息するコモチハナガササンゴ群集が生息する。また地形も豊かである。その一例が、最近判明した辺野古沖にある長島の鍾乳洞である。石筍が光の指す方向に成長する「光鍾乳石」を持ち、日本で初めて記録された高い科学的価値を有する鍾乳洞である。

この海域は日本の生物多様性の観点から重要度の高い海域の 1 つに選ばれており、「沖縄県の自然環境の保全に関する指針」にて最も厳正な保全が求められるランク I (1998) に指定され、大浦川の河口はラムサール条約湿地の潜在候補地となっている。

辺野古・大浦湾のホープスポット認定審査においては、その海域に生息する絶滅危惧種、新種、生物の移動など生物多様性に関する情報、文化的な価値に関する情報、観光価値、美しさ、教育プロジェクトや科学的研究の有無、そして登録された際に地域住民の支援が得られるかどうか、政府による海の保護に関する情報などが問われる。14 名の海洋生物・生態系分野の専門家による審査の結果、この海域は世界に誇る十分な科学的価値を持つばかりでなく、文化的・歴史的・精神的価値、人間活動による影響をくつがえすことができる可能性のある海域であり、これから一緒に守っていこうとする地域のサポートがあることから、ホープスポットにふさわしい場所として認められた。対象は辺野古・大浦湾を中心とした松田 (宜野座村) から天仁屋までの 44.5 km² の海域である。

ホープスポットの認定を受けて、ホープスポットを申請した日本自然保護協会をはじめとする10団体は署名活動を実施した。2019年10月末から翌年の1月の期間でインターネット2万1,296名、紙媒体4,629名のご署名をいただき、日本政府に再度の環境調査の実施を求める要望書を提出した。沖縄県には、チリビシのアオサンゴ群集を県の天然記念物に指定するなど、沖縄県の権限で可能な同海域への保護の網を求める要望書を提出した。今後も辺野古・大浦湾が世界的に認められた大事な海域・ホープスポットであることを多くの人に知ってもらい、辺野古新基地建設中止および損なわれた場所の自然再生を求めている。



図1
ハワイのパパハナウモククア海洋国立モニュメントと辺野古・大浦湾の生物多様性の比較
(出典:日本自然保護協会)



図2
辺野古・大浦湾一帯ホープスポット名護市天仁屋から宜野座村松田までの海域
(出典:日本自然保護協会)

公益財団法人 日本自然保護協会について

日本自然保護協会は、自然保護と生物多様性保全を目的に、1951年に創立された歴史のある自然保護団体であり、会員は2万4千人である。ダム計画が進められていた尾瀬の自然保護にはじまり、屋久島や小笠原、白神山地などの世界自然遺産登録への礎を築き、日本全国で壊れそうな自然を守るための様々な活動を続けている。「自然のちからで、明日をひらく。」という活動メッセージを掲げ、人と自然がともに生き、赤ちゃんから高齢者までが美しく豊かな自然に囲まれ、笑顔で生活できる社会を目指して活動している。山から海まで、日本全国で自然を調べ、守り、活かす活動を続けており、特に、沖縄ではサンゴ礁生態系の保全のために、市民参加による海草藻場やサンゴの現地調査などをもとに、辺野古新基地建設問題に20年以上取り組み、ホープスポットの認定を他団体と連携し働きかけた。

<http://www.nacsj.or.jp/>

シルヴィア・アール博士 からのメッセージ



ミッション・ブルーを代表して、辺野古・大浦湾一帯を守るために尽力している 守り手（チャンピオン）の皆さんに敬意を表します。この海域は、2019 年 10 月にホープスポットとして認定された場所です。しかし、埋め立て工事の強行により、この特別な場所の自然環境は多大な被害を受けています。今、世界中の海草藻場について重要性が認識されつつあります。酸素を生成し二酸化炭素を貯留する上で、非常に重要な役割を果たしているからです。気候変動と関連した世界の安全保障という観点からも、海草藻場は非常に重要です。

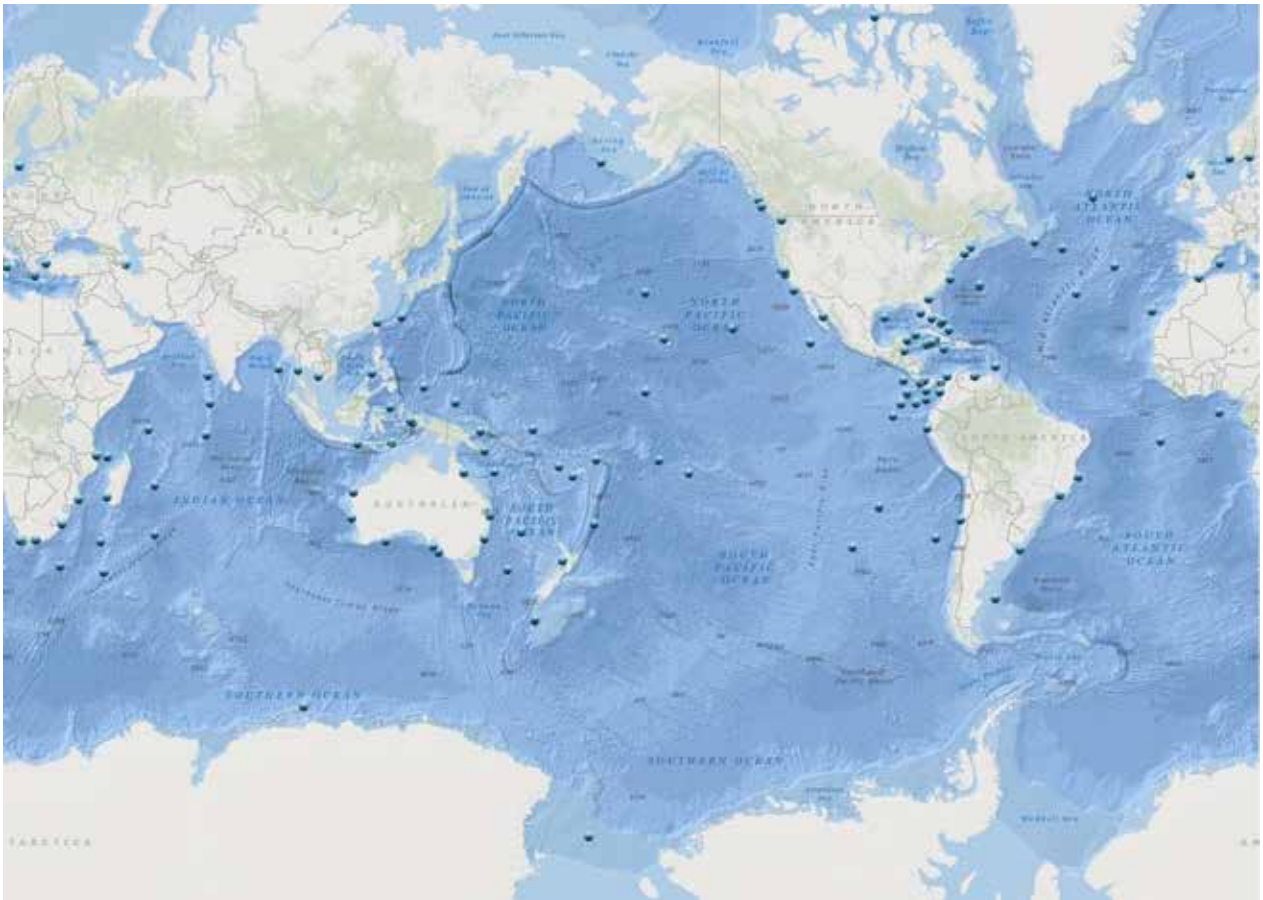
安全保障や軍事基地が、私たち人類にとって必要であるということは理解できます。しかし今私たちには、自然の生態系を究極の安全保障と考える見方が必要だと思ふのです。地球は衰退傾向にあります。地球を生命がすめる場所に保つための生物多様性は失われつつあります。究極的な安全保障問題です。この惑星の問題は、私たちすべてにとっての問題です。今、私たちは知っています。海が気候を左右し、天候を左右し、この惑星の現象すべてを決定付けることを。

私たちに今できることは、海の生態系を守ること、私たちの心に触れるジュゴンのように特別な力を宿す生きものを守ることです。人々はジュゴンの生命や安全を守ることの大切さを理解できるはずですが、ジュゴンは生存の危機に瀕しています。海草藻場を破壊するような行為によって。海草藻場はジュゴンの生存の鍵です。食物を与え、呼吸を可能にする、ジュゴンのすみかです。また同様に、200 種を超えるほかの生物種にとってもすみかなのです。それらの中にはアオサンゴも含まれます。存在自体に特別な魅力を備える生きものです。

私たちは、選択するという力を持っています。今生きている生命を守り、あらゆる生き物が生存可能な地球にしていくか、それとも私たち人類の歴史を繰り返し、地球の自然が破壊し尽くされるまで、自分たちの意のままに自然から奪い続けるのか。

ですから、私は皆さんの努力に賞賛を送りたいのです。皆さんの声と「スーパーパワー」を、大切なものを守るために用いていることに。皆さんを支えるために、ミッション・ブルーはできることは何でもしたいと思っています。今こそが、かつてなかったほど重要な時です。今こそ、私たちの生命を守るためにも、辺野古・大浦湾一帯をはじめとする重要な海の生態系を守るときです。

皆さんの活動に感謝します。皆さんがしているすべてのことを、心から賞賛します。世界をより安全で、より良い場所にするために。



図「世界のホープスポット」
<https://mission-blue.org/hope-spots/>

「ミッション・ブルーとホープスポット」について

世界で最も重要な海域に“保護の網”をかけるために、シルヴィア・アール博士が考案した制度です。ホープスポットの認定を進めるためにミッション・ブルーという団体が立ち上がりました。

生物多様性や地形の豊かさ、文化や歴史、地域の人たちの想いや活動などが評価されます。2009年から行われ、現在では世界で135カ所が認定されています。2019年に辺野古・大浦湾一帯が日本で初めて認定されました。

海と陸が出会う場所 ～辺野古・大浦湾～

中井達郎

海岸はどこでも海と陸とが出会う場所である。なかでも、辺野古・大浦湾は、他の海岸に比べても、さまざまな海と陸の出会いで特徴づけられ、多様な自然が育まれている。

沖縄の海岸は、サンゴ礁に縁取られている点で、サンゴ礁が発達しない温帯や寒帯の海岸と大きく異なる。辺野古・大浦湾もサンゴ礁が発達する。サンゴ礁は、沖合から急に水深が浅くなる「礁斜面」と浜に向かって広がる平坦で浅い「礁原」とからなる。「礁斜面」と「礁原」の境で波が砕け（砕波）、白波が立つ。浜からずいぶん沖合で白波が立つのがサンゴ礁の特徴である。辺野古崎の沖合で白波が立つのは、浜から1 kmほど沖合である。その間の平坦な「礁原」には、「イノウ」と呼ばれる浅いプールもあり、さまざまな生物が暮らしている。地域の人々は、大潮の干潮時には、「礁原」を歩いたり、泳いだりしながら、魚介類を捕ってきた。海でありながら陸の延長のように利用してきた。沖縄の信仰では、白波の立つ手前は人間の世界、白波の向こうは神の世界とされてきたと言われる。

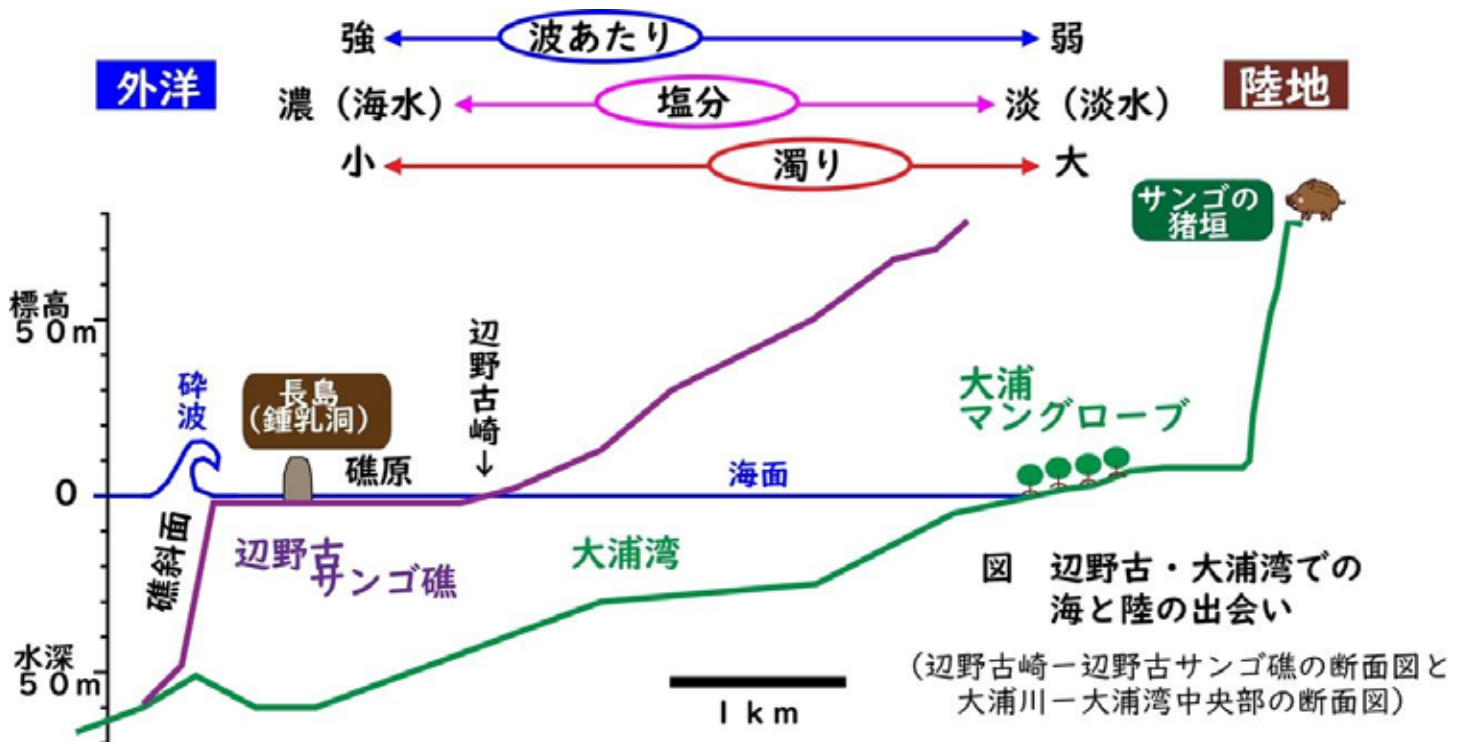
このような海と陸の両面性を持つサンゴ礁に加えて、辺野古・大浦湾には、沖縄の他地域にはほとんど見られない地形的な特徴がある。それは、深く切れ込んだ湾である。海面すれすれにある礁原の脇に水深60 mに達する深場がある。その切れ込みが作る湾は、外洋からやってくる波・海水と陸から川によって運ばれてくる淡水や土が出会う場所となっている。湾の入口から湾の奥へと、「波あたり」「塩分」「濁り」などの環境が変化するのである。このような海と陸との出会いによって、この地域には「サンゴ礁」「泥の深場」「干潟」「マングローブ」といった多様な「場所」が用意されているのである。

さらに、最近発見された辺野古崎沖の「長島鍾乳洞」も、過去数十万年間の中での海と陸との出会いを物語っている。長島を作っている石灰岩は過去のサンゴ礁であり、海面の下で作られたものである。しかし、長島で発見された鍾乳洞は、空気や土に含まれる二酸化炭素を溶かし込んだ弱酸性の淡水が作ったカルスト地形といわれるものであり、海面下では作られない地形なのである。長島はとても小さな島であるが、おそらく過去においては、今サンゴ礁となっている辺野古周辺は陸であった可能性が高い。ひょっとすると宜野座や金武まで石灰岩台地が広がっていたのではないかと考えている（浦田・中井・木村・藤田,2021）。

このような海と陸との出会いが作り上げた多様な自然の中で地域の人々は暮らしてきた。近辺の集落を歩くと、その石垣にはサンゴが用いられている。また大浦区から瀬高区の山中、高いところでは標高80 m以上の場所にもサンゴがある。それは、リュウキュウイノシシの食害から畑

を守るために作られた猪垣に海のサンゴが使われているのである。もちろんそのようなサンゴの利用はサンゴ礁が健全な状態で維持されていた時代の話であり、またすべて人力による限られた利用であった。人と自然のかかわりを伝える文化である。

以上のように辺野古・大浦湾は海と陸との出会いによって特徴づけられる。それは、地域にとって、そして沖縄にとって貴重な財産だと考えられる。



参考文献：

中井達郎・黒住耐二・安部真理子・大野正人,2009. マップで考え、伝える生物の多様性. 地図中心, 442:16-21.

浦田健作・中井達郎・木村 颯・藤田喜久,2021. 沖縄県名護市辺野古沖合の長島における鍾乳洞の地形とその形成. 沖縄地理, (21) :55-71.

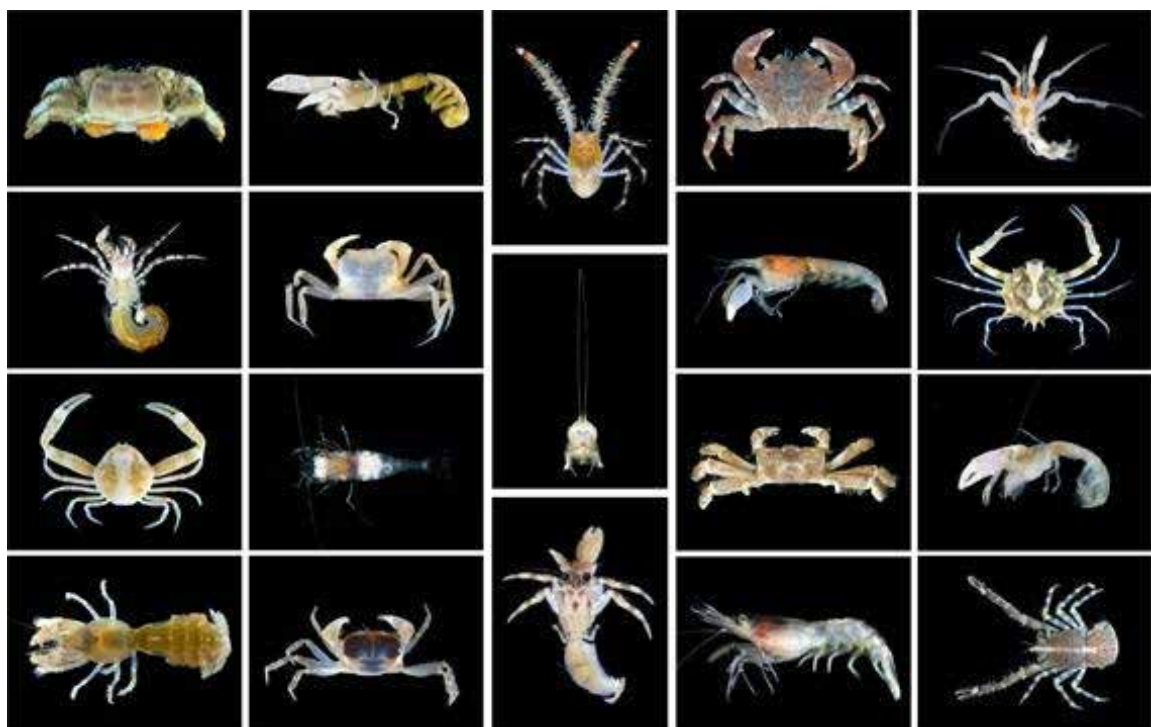
大浦湾の生物多様性について～甲殻類を中心に～

藤田喜久

沖縄島の東部沿岸には、中城湾・金武湾・大浦湾などの閉鎖的水域（内湾環境）が存在する。大浦湾には、流入河川、砂浜海岸、岩礁海岸、飛沫転石帯、砂泥干潟、マングローブ林、海草藻場、サンゴ礁・サンゴ群集、ガレ場、砂泥底質域などの多様な微小環境があり、それらの環境を生息場所として利用する多様な生物がいる。

演者は、2008 年以來、大浦湾において十脚甲殻類（エビ・カニ・ヤドカリの仲間）の種多様性を解明するための調査を行なっている。特に、2008～2009 年に実施された調査プロジェクトによる調査では、62 科 241 属 496 種もの十脚甲殻類を確認することができた。しかも、驚くべきことに、これらの中には少なくとも「40 の未記載種（＝新種）」と「35 の日本初記録種（日本での生息が確認されていなかった種）」が含まれていた（なお、これらの十脚甲殻類は、現在でも研究が進められている）。ただし、この結果が直ちに大浦湾の「特殊性」を示すことにはならないことに注意されたい。なぜなら、これまで沖縄の海域では、「サンゴ礁」に研究が注力されてきた経緯があり、閉鎖的水域（内湾環境）における生物相研究はほとんど行われてこなかったためである（大浦湾と比較対象になる情報が不足している）。「ある地域」の自然を守ろうとするとき、そこに「どれだけの種類の生物が存在しているか」を知ることは、守るべき対象を明確にする上でも重要なことである。しかし、そうした研究（生物相研究）に注力する研究者は意外にも少数で、その研究活動への理解やサポートも決して多くはないため、研究があまり進んでいないのもまた一つの現状である。

今回の講演では、大浦湾（および長島、平島、安部オール島も含む）における多様な自然環境と、大浦湾に生息する十脚甲殻類の種多様性について話題提供する。



写真：藤田喜久（沖縄県立芸術大学）

ホープスポット認定の意義：辺野古・大浦湾を守るために

吉川 秀樹

環境を守るグローバルな取り組みの一つに、影響力を持つ NGO/NPO が、個人や他の NGO/NPO の活動を表彰、あるいは認定する制度がある。この制度は、ここ 30 年の間に、国際機関や国家の環境保護の取り組みに連動、補完、あるいは対抗する形で展開・発展してきた。ミッション・ブルーによるホープスポットもその流れを反映しているが、活動ではなく、保護すべき海域を認定しているのが特徴である。辺野古・大浦湾一帯のホープスポット認定の意義は、そのグローバルな文脈とホープスポットの特徴の中に見出すことができる。

まず NGO/NPO の表彰や認定による環境保護の取り組みの背景をみてみよう。国際機関や国家の環境条約や環境保護の制度は、地域住民や現場で活動する NGO/NPO の協力なしでは実質的効果を生まない。また国際機関や国家の制度の成立には時間がかかり、成立した制度が政治的理由で形骸化される場合も少なくない。一方、地域住民や NGO/NPO の活動は、その多くが財政や人力の面で限定的であり、活動自体の規模が小さくなる。その結果、他からの認識や評価が得られにくいのが現状である。それゆえ NGO/NPO による表彰や認定は、地域に根ざした活動の重要性を認識させ、同時に活動をグローバルマップに載せることによりさらなる保護の取り組みに繋げることを目的としている。

2009 年に始まったホープスポットの取り組みは、国際条約に連動しながら「迅速性」を持って展開されてきたといえる。現在は、2030 年までに地球の海域の 30 %を「海洋保護区」とするという生物多様性条約の「30 by 30」の目標を枠組みにしている。これまで「世界に誇れる十分な科学的価値、文化的・歴史的・精神的価値」があり、「人間活動による影響をくつがえすことができる可能性」を持ち、「一緒に守っていこうとする地域のサポートがある」約 130 の海域がホープスポットに認定されてきた。「迅速性」は危機に晒される地球の海を守るためには不可欠であり、同時に、このホープスポットの数は、ホープスポットの取り組みに参加する地域住民や NGO/NPO が世界中に存在することを意味している。

ホープスポットの取り組みの最大の特徴は、個人や NGO/NPO の活動ではなく、海域自体を認定しており、「包括性」と「発展性」を内在させていることだといえよう。すなわち、ホープスポットに認定された海域に対して、様々な認識や価値観をもつ地域住民や NGO/NPO、そして行政がより多く関われる仕組みとなっている。実際、辺野古・大浦湾一帯は、豊かな生物多様性のホットスポットだけではなく、米軍基地建設反対運動を通して示される人権や平和への取り組みのホットスポットである。同海域のホープスポット認定は、縦割り行政に縛られる政府や県、多様な価値観や認識をもつ地域住民、NGO/NPO に問題の関連性を認識させ、包括的かつ創造的な取り組みを促している。そして「30 by 30」の枠組みが、世界各地のホープスポットとの連帯の可能性

値観や認識をもつ地域住民、NGO/NPO に問題の関連性を認識させ、包括的かつ創造的な取り組みを促している。そして「30 by 30」の枠組みが、世界各地のホープスポットとの連帯の可能性を与えている。

NGO/NPO による表彰や認定の取り組みはその正当性の証明が課題とされるが、ホープスポットの正当性は、創立者のシルビア・アール博士の海洋学者や保護活動家としての実績と功績、そして認定対象海域の評価に国際自然保護連合（IUCN）の専門家が関わることで確立されている。また National Geographic や Rolex 等による支援もその正当性を支えている。言い換えれば、辺野古・大浦湾一帯はグローバルな努力を持って守られるべき海域だと認定されているのである。

辺野古・大浦湾を守るために、ホープスポットの認定を踏まえた二つのレベルの連動するアクションを提案したい。まず沖縄でのアクションである。ホープスポット認定の理由ともなった市民社会による環境保護活動、基地建設反対運動、環境調査、「満月祭り」を継続・発展させながら、沖縄県によるホープスポットを意識した取り組みが必要だ。市民社会が提案してきた「チリビシのアオサンゴ」の天然記念物指定など、行政の仕組みを使った保護の動きが可能なはずである。そしてもう一つはグローバルなレベルでのアクションである。特に米国のホープスポットとの連携を通して、米政府や米国市民に情報を提供し、基地建設中止を働きかけていく取り組みが必要である。なぜホープスポットで、環境を破壊しながら基地建設が強行されているのか。この矛盾を、軟弱地盤の問題、民主主義、人権、平和の問題と結びつけ、沖縄県と市民社会が協力して伝えていく必要がある。

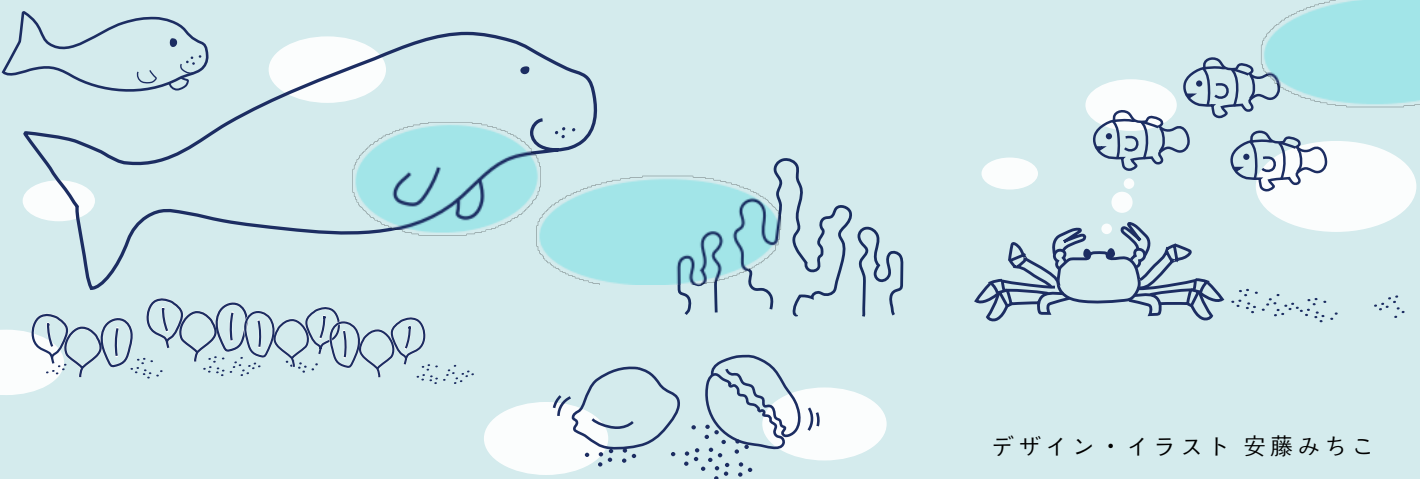
参考文献：

O' Neill, Kate 2017 The Environment and International Relations. Cambridge University Press.

吉川秀樹 2020

「辺野古・大浦湾一帯のホープ・スポット（希望の海）の認定が意味すること～環境リアリズムの視点から～」『沖縄を平和の要石に』（1）pp.81-93.

団体紹介：Okinawa Environmental Justice Project <http://okinawaejp.blogspot.com/>



辺野古・大浦湾シンポジウム 2021
～世界に認められた沖縄の宝の海『ホープスポット』を未来へ～
講演要旨集

発行 沖縄県
発行日 2021年9月11日
編集 公益財団法人日本自然保護協会
連絡先 沖縄県辺野古新基地建設問題対策課
900-8570 沖縄県那覇市泉崎 1-2-2 TEL 098-866-7495
日本自然保護協会保護部
104-0033 東京都中央区新川 1-16-10 ミトヨビル 2F
TEL 03-3553-4101
